

であり、それらを組み合わせることによって、より有効な情報検索を行うことができる。

### 3

以上、ERICとその検索について簡略に述べた。紙数の制限から、ERICのカヴァーする主題範囲やその特徴等について述べるゆとりはもはやないが、ERICは、教育諸科学とその関連領域（心理

学、社会学、あるいは医学の分野まで）にわたるかなり学際的な広がりを持ち、それに対応した広い研究者層の要求に応じ得ることを附言しておく。また、ERIC以外の人文・社会科学系のデータベースと併せて使用することによって、より有効な情報検索への道が開かれることであろう。

## 大学図書館職員長期研修に参加して

文学部図書室 森 稔 夫

去る8月4日から8月23日までの3週間、東京学芸大学を中心として上記の研修が行なわれた。研修の行なわれた施設及び見学先は20ヶ所程にも及び、それぞれが特色のある活動を行なっており大変参考になった。

この研修では36名の参加者は自然系と人文・社会系とにそれぞれ18名づつに分かれたが、参考業務の実習以外は同一のカリキュラムで行なわれた。今から思うと自然系と人文・社会系とに分ける必要性は余り無かったのではないか。というのも、異った分野の実情を知る事は、お互いに刺激にもなり、そこから得る所も多いと思われるからである。もちろん図書館のサービスといっても、それぞれの学問分野によってその性格が多少異っているのも事実である。例えば自然系と人文系とでは、利用者の要求するサービスにしても、前者は雑誌等を中心とし、速報性を重視するのに対し、後者はどちらかというと単行書を中心として、速報性に対してはそれほど厳格性は要求されないといった点などである。

さて、この研修ではこれからの大学図書館の在り方についての、マクロな視点からの長期的ビジョンが提起された。本年1月、学術審議会から出された答申「今後における学術情報システムの在り方について」は、これからの日本の文教政策の中でも重要な位置を占める様に思われる。この答申は、国家的見地からの学術情報システムを指向しており、図書館だけを対象としたものではない

が、その計画の中では図書館、特に大学図書館の果す役割には大きいものがある。

この様なトータルな学術情報システムが考えられるようになった背景には様々な要因があるが、一口に言えば学問の進歩に対する情報の提供をする側の立ち遅れであり、そのギャップを埋めるための対応であり、それを可能とする技術的背景として、コンピューターや通信技術の目覚ましい進歩がある。

問題を図書館に限定してみると、先ず第一に一次資料の充実が必要であり、次に全国的ネットワークの問題がある。計画されている全国的ネットワークの構成は、中枢センター、ローカルセンター、端末館といった重層構造を持っており、各図書館は端末館の位置を占める。京大などの場合は、学内の図書館群が学内のネットワークによって一つにまとまる必要があろう。

オンラインネットワークシステムを利用して計画されているものには次の様なものがある。

(1)目録業務の機械化；LC-MARC, JAPAN-MARC, ローカルインプット等を用いてのShared Cataloging.

(2)オンライン情報検索；データベースを利用した参考業務。

(3)所在情報の形成；雑誌の場合で言うと学術雑誌総合目録を基本とし、単行書の場合には(1)のShared Catalogingに並行して所在情報も形成される。が、既に所蔵されている膨大な単行書につ

いての全国的所在情報の形成には多くの困難が伴うであろう。

これらは壮大な計画であり、実現には当然困難も予想されるが、既に欧米に於いては様々のネットワークが実際に稼働しているのであるから、不可能ではないであろう。その場合当然のことながら、個々の図書館と、その中で働く図書館員の協力は不可欠である。全国の何百、或いはそれ以上の図書館を巻き込むこの様な計画は、図書館界にとっては革命的な出来事であろう。

ではこれに対して実務に携わる我々図書館員は

どう対処すべきであろうか。図書館の基本的使命は先ず第一に利用者へのサービスである。そのサービスをいかに効果的に行うかが図書館員に与えられた課題であると思う。全国的ネットワークの完成はまだまだ先の事であろうが、たとえそれが完成したとしても、個々の図書館の役割は増大こそすれ減少する事はないであろう。そう考えると各自の置かれた状況に於いて日々、問題意識を持ちながら、地についた営為に努めるべきであろう。マクロの視点とミクロの視点を両方兼ね備えた複眼的思考が要請されている様に思う。

—— 図書室めぐり ——

## 霊長類研究所図書室

犬山の駅に降り立つと、町はずれの高みに灰色の大きな建物がみとめられる。増築を重ね、設立後10年目に当たる1977年に完成した霊長類研究所の本棟である。徒歩約20分の道のりは都会人には少々遠いが、カワセミやカイツブリにみとれ、イタチに驚き、足元の野草にひそやかな花を見つ歩を運べば、いつの間にか着いてしまう。

さて、敷地内には、正面に本棟、左手前に宿泊棟、右手前に本年6月に竣工した繁殖コロニー、本棟西端に接し犬山城をバックにしてサル施設棟、サルの屋外ケージ、育成舎、放飼場といった具合に、隣の日本モンキーセンターとの境界までいっぱい附属施設が連なる。

霊長類研究所は、霊長類に関する総合研究を目的として、1967年6月に創設された。9部門2施設、職員数80余名の研究体制をとっている全国共同利用研究所で、図書室は、各研究部門の校費で購入した図書・雑誌を一ヶ所に集中するという形で運営されている。永年、教官研究室の一つを図書室にあて、書庫・閲覧室・コピー室・事務室をかねていたが、現在は、本棟3階の西端に一面を占めている。ソファーと大机を備えた雑誌閲覧室。開架式書庫と6つの個席。コピー機、欧文・和文のタイプライター、簡易製本機、スライド作成機、その他でいささか手狭なコピー室。事務室



では司書2名が日常業務にあたっている。

9つの研究部門が示すように、霊長類学とは学問の全分野にまたがる広い研究分野である。しかし、サルそのものを対象にした研究書となると、これが意外に少ない。せめて手にはいるものはすべてそろえて、霊長研にいけばサルの本は何でもある、という状態にしたいと願っている。境界領域をカバーするものや参考図書の性格のものを備えるために、図書室独自の選択に委ねられた図書購入予算がついており、教官4名で構成される図書委員会が、所員からの推せんに基づいて選書している。1980年7月現在、蔵書数6,000冊余。うち製本雑誌が約2,000冊。継続購読中の外国雑誌が約100タイトル。和雑誌約20タイトル。蔵書数はまだ少ないが、長谷部言人博士の蔵書の一部を